渡辺幸治氏（元ロシア大使）インタビュー
日時：1999/8/26
場所：日本国際交流センター
聞き手：田中明彦
　　村田晃詞

渡辺：

ハーバードでは、「アメリカの外交政策における日本の位置づけ」というペーパーを書きました。当時は、1973年から1974年ですから、米欧関係が緊張した時代だったわけです。にもかかわらず、米欧関係は、どんなに悪くなっても共通の文化遺産というのが支えになって、必ず復元するという前提でものを考えている。僕の仮説はこの自動的な復元性というのが日米関係にも当てはまるのかどうか、というものでした。ハーバード、ＭＩＴといったいわゆるケンブリッジ・インテレクチュアル・コミュニティの約30名の先生に同じ質問をして、それでまとめたんです。

これが面白くてね、ライシャワーさんやフェアバンクさんもいらしたんです。中にはインタビューしても先方の発言が全然分かんない先生がいてね。それが、カール・ドイッチェ教授。ノート取ったんだけれども、読み返しても全然分かんないんですよ。それからポール・サミュエルソン教授もいたんです。彼には15分くらい待たされて、部屋に入ったんですけれど、「インタビューに何分必要か」と聞かれて、「1時間必要です」と答えたら、「30分だ」といって値切られちゃいました。でも「インタビューする時は、テープを持って来るもんだ」といってテープを貸してくれてね、とってもいい、立派な人だった…。そういうインタビューをまとめて、ペーパーを書いたんです。

村田：

それは、ライシャワーのところでお書きになられたんですか？

渡辺：

ハーバード大のＣＦＩＡ（Center for post-graduate International Affairs）です。ＣＦＩＡというのは、今でもそうですけど、ポスト・グラジュエイト・スチューデントと同時に、一年にだいたい20人くらいの各国の外交官を呼んでるんです。僕はそこに参加したんです。本当はそれが夢だったんです。そこで僕は大変いい知的経験をさせていただいたんです。

ただ、その後、ケンブリッジ（マサチューセッツ）からサイゴン（ヴェトナム）に送られた。僕の前任者が西山健彦という先輩で、彼は一年前にハーバードを終わってビエンチャンに行った。僕の一年下に佐藤嘉恭（前中国大使）さんがいて、彼は理屈の上では本来カンボジアに行くはずだったんです。しかし彼がハーバードに行った時には、カンボジア政府は崩壊して存在しなかった。したがって、そこから途中下車して香港に行ったんです。これは冗談です。

僕は、ハーバードに行く前が経済局の課長で、その前のポストがアジア局の中国課の補佐。1968年から1971年の夏までです。

田中：

中国課の補佐ですか？

渡辺：

はい。正確に言いましょう。1968年夏から1971年の8月までが中国課の補佐、その後経済局のＯＥＣＤ課長をやって、1973年8月からハーバードに行ったんです。まさに 1971 年夏のニクソンショックの時の中国課の首席事務官なんです。キッシンジャー・ショックの予感があったと言いたいんですけど、実際に予感があったかどうかは、分からないんです。ただ、米中関係に何か動きがあるんだろうということは、僕自身は、感じていました。僕はその3年前に中国課の補佐になりましたが、それまで中国問題に経験が無かった。中国課のあとの皆さんは中国屋さんなんです。中国課長は橋本恕（元中国大使）という大変な人物でした。彼は中国サービス以外はほとんどやったことがない。しかし、中国語が全然出来ないという有名な人物でした。

どんどん余談になりますけど、外務省の中で課長がイニシアティブをとって非常に大きな日本外交の舵取りをするということは、難しいことなんです。その難しいことをやった例として、一つは、橋本恕の日中国交正常化。もう一つは、千葉一夫（元英国大使）の沖縄返還。もうそういう時代じゃ無くなったんでしょうね。ただ、千葉一夫の力と情熱と、橋本恕の力と情熱というのは本当に凄かった。課長でありながら局長をすっ飛ばすんです。橋本さんの場合、大臣もすっ飛ばすことがあったんです。僕はその下に3年くらいいましてね。非常に同情された訳です。

ニクソン・ショックは 1971 年7月１５日。予感があったというのはね、その年の前の年1970年12月にライフ誌が作家エドガー・スノーの毛沢東との会見の記事を出します。それから71年4月だと思いますけど、ニクソン大統領が記者会見で、今でも覚えてるんですけど、“I hope , as a matter of fact , I expected to visit China sometime in the future”と言ったのです。何故そんな事に気が付いたかというと、中国を全然やったことのない僕が首席事務官になったものですから、やはり米中関係ということに視点を置いて仕事をしようと思っていました。少なくとも、中国課の中で自分が一番米中関係を知っているということをセールスポイントにしていこうと思った。それで関心があったんです。

僕は予感みたいなようなものがあったということを申し上げますけれども、一つだけはっきりした証拠がありましてね。キッシンジャーはロンドンに行って、それからパキスタン経由で中国に行ったんです。その時にパキスタンの首都、イスラマバッドの日本大使館宛に僕自身が電報を起案して大臣名で電報を打ったんです。中国課の名前でね、「キッシンジャーの去就に気をつけてくれ」ということを訓令しました。それで当時のパキスタンの日本大使館の次席が米国大使館の次席に会って、「キッシンジャーはどうしたんだ？」と照会したら、「キッシンジャーは病気になってラフォールに行った」という説明を受け、そういう電報を打ってきたんですよ。

それで忘れもしない7月15日、ＦＥＮ（米軍放送）の放送があったんです。その前に予告がありました。「ニクソン大統領が特別声明を出します」と。従って僕は課の中でそれを聞いていたんです。その時は本当にショックでした。“Dr. Henry Kissinger … was in Beijing” です。それで「大変だよ！」と会議中の課長と他の連中を呼び出して来てですね…。そして僕が最初に思ったのはね、「何を！嘘をつかれた」と。それですぐ電報打ち直して釈明を求めたんです。それを受けてイスラマバッドでわが方の

次席がアメリカの次席にもう一度会いに行ったら「外交官の職業ではどうしても言えないことがある。申し訳ない」と陳謝されたました。

それで、去年、キッシンジャーと会食した際、その話をしたんです。そうしたら、「そりゃそうだ。誰にも知らさないことだった。」ロジャース国務長官も出発まで知らされなかったということなんです。「何故それじゃ事前通告が無かったのか」ということを直接キッシンジャーに聞いたら、「話したら必ず漏れる」と言いました。佐藤総理にキッシンジャーが話をしたとしたらね、佐藤総理だけにしたとしても佐藤総理にとっては誰かに話さないと、聞いたという価値はない。「誰かに話すだろう、その話を聞いた人は必ず誰かに話さないと価値がないだろう。必ず漏れる」ということでした。

ただね、一般的に根強い噂話としては、ニクソンは佐藤総理にたいして不満があったという話です。沖縄返還にコミットメントする時に、日米間で極めて深刻な問題として繊維問題がありましたでしょ。確かにね、そう言われればね、ハルペリン補佐官が当時言ってましたけど、タイム誌とニューズウィーク誌の小さなコラムに、「ホワイトハウスは、日本政府に対して沖縄問題を片付けたにも拘らず、繊維の交渉はうまくいっていないということについて不満がある」という記事が出た。この欧米間では常識と思われる明確なシグナルを日本側が読み取れなかったことはね、非常に大きな問題だと言われてね。

村田：

外務省の北米局の北米一課で、アメリカの新聞とか雑誌とかテレビとかラジオとかを継続的に分析していくことは、当時はやってなかったんですか？

渡辺：

北米一課ではやってなかったし、外務省の地域局で、Ａという国とＢという国と、その地域が分かれた関係をどこの課が見るかという問題があるわけですが、第一義的主管は、小さい方の国なんです。だから米中関係は…どっちが小さいかな、重さから言うと、アメリカ局では見ないんです。米中関係は中国課がやる。ちなみに、世界的に同じくらい大きな国同士の問題になったのが、中ソ関係。これは、その当時できた国際資料部の分析課がやった。だから分析課は、中ソ関係をやるところなんです。中国の分析及び中国の対外関係の分析は中国課の天領だった時代がありました。当時、分析課長だった岡崎久彦さん（元タイ大使）は複眼的思考ということから、分析をやるところは複数あってしかるべきであるという議論でした。この意見は正しかったと思います。

村田：

橋本課長が非常に日中国交正常化に熱心だったというお話でしたが、日中国交正常化に熱心に走る中国課と、北米一課というのは…。

渡辺：

日中国交正常化自体には熱心では無かったんです。キッシンジャー訪中の前までの期間、日中国交正常化というものをアメリカに先んじてやるというのは、不可能だという前提があったわけです。それは台湾問題です。日中国交正常化というのは即、台湾問題ですから。アメリカがいる以上、アメリカの意に反して日中国交正常化というのはありえない。日米安全保障条約上できない、という前提ですね。国交正常化にいたらない日中関係の推進はできるはずだという議論はありましたよ。実際に覚書貿易

とか、そういうのは全部やってました。

僕が中国課にいた時にカナダが中国承認をやったわけです。

田中：

先程、中国課にいらっしゃった時にある種の予感みたいなものがあったとおしゃいましたが、この時期に香港総領事をされていた岡田晃さんの書かれた本がありますよね。それで彼はその当時から本省には米中接近はほとんど必然的で不可避であるとずっと言っていたにもかかわらず、外務省は何も注目しなかったというようなトーンの回顧録を書いてますけれども、何かその辺の…。

渡辺：

それは嘘です。そんなに強く言ってた訳ではない。米中接近というよりもむしろ日本として中国との関係を相当改善することは、日米関係を損なわなくてもできるはずだという議論は、中国課としても相当ありました。

田中：

1971年の一番最初の施政方針演説で、中華人民共和国という言葉を佐藤さんがお使いになったと思いますけど、これは中国課でお考えになったのですか？

渡辺：

それはまさに中国課です。それで、ピンポンもありましたしね。やはり、それはそうだったと思います。ただ、私は中国課でそういうショックを受けた後、2週間で経済局へ行っちゃった。2週間したらもう一つのニクソン・ショックであるドル・ショックが起こっちゃったという訳なんです。

一番中国課で苦しんだ案件は国連代表権問題なんです。これは外にどれくらい出ているか分からないけれども、戦後の外務省の歴史の中で最も厳しい政策論争をやった問題なんです。アジア局対国連局及び国際資料部。役者がね、アジア局が橋本さん、国連局が青山学院大学の先生をした天羽国連局政治課長。それから国際資料部が岡崎分析課長。そこで逆重要事項をやるべきか、やらないべきかという議論をしました。1970年ですね。その時はするべきじゃないと、その時は逆重要事項が通ちゃった。でも、やはり日中国交正常化を将来考える上で、日本は共同提案をやるべきじゃないということを…。そんな記憶が今でも強烈にありますね。

田中：

それは、ニクソンショックの後の2ヶ月くらいというか、その秋の国連総会でどういうふうにするかということは大変大きな問題だったんですね。渡辺さん自身は途中で…。

渡辺：

その通りです。しかし、その問題もあって時々中国課に行っていました。今でも僕には自信がない点があるんです。というのは、逆重要事項の共同提案国になるべきじゃないということを中国課は国連局に徹底的に言ってたし、僕も言ってたんですよ。だけれども、結果的に逆重要事項の提案が負けて中国が国連に入るわけですね。しかし負けてもね、日本はそこで台湾との関係で筋を通したという事実は、その後の日中国交正常化の際の台湾問題処理にとってよかったのだという説があります。この点はね、僕には率直に言って分からない。

田中：

渡辺さんの目から見てると、その最後に日本は逆重要事項指定の方に乗るわけですよね。

渡辺：

乗るわけです。乗ったけど負けたんです。

田中：

乗ったという、負けたというその決断は、誰がしたんですか？

渡辺：

決断は次官です。法眼次官。

田中：

総理はどうですか？

渡辺：

総理は「会議の朝は賛成だと言い、昼は反対だと言い、夜は棄権だと言った」という説がありました。揺れたんです。アメリカからもものすごいプレッシャーがあったんです。その時、僕は、キッシンジャーを訪中させておいてアメリカはけしからんと思いましたよ。

渡辺：

法眼さんはね、その時はがんばりました。彼は、反共の士だった。逆重要事項問題の時点では、反共の対象は中国・ソ連両方だった。そのうちに中ソ対立との関連で、反ソが強くなっていき、たいへんな親中になった。そこは非常におもしろかった。

田中：

ニクソンショックの時にですね、通常私どもが調べている通報があった経路は、ウィリアム・ロジャースから牛場大使に連絡があって、最初なかなか連絡が取れなくて、でしばらくして見つかって、日本に行って佐藤さんのところに行ったのが発表の３分前だった、ということが言われているんですけど。

渡辺：

多分そうだと思います。その日は確かアメリカの海兵隊の記念日だったんです。それでね、牛場大使は、海兵隊の記念日のパレードの視察に行ってたんですよ。だから数時間つかまらなかった。

田中：

それで、そういう情報は外務省の中でいうと、牛場大使から…。

渡辺：

安川外務審議官。

田中：

外務審議官のところに行って、それで行ったわけですね。そうすると、中国課はその時はよく分かっていないわけですか？その辺のタイミングでいうと渡辺さんはさっきＦＥＮを聞いていたとおっしゃってたけれども。

渡辺：

そうです。

田中：
　そうすると、3 分前の通報の時にはご自身はそういうことがあったということも分からなくてＦＥＮを聞いていたわけですか？
渡辺：
　そうです。それでね、牛場さんから電話連絡を受けた際、安川さんは思わず吸ってた「憩（煙草の銘柄)」を落とした。ショックで煙草を落としたという噂が流れた。その話をしたら安川さんは「そんなことはない」と否定するんだけど、それを見ていた人がいる。
田中：
　電話でですか？
渡辺：
　ええ
田中：
　つまり電話で受けてて、吸っていた煙草を落としたということですか。
渡辺：
　ほんとに当時は大変なショックで、僕はこの経験で教訓として学んだのは、やはり外交官にとって、情勢判断で重要なことは何があっても驚かないという心構えであり、そのためには、ありとあらゆるシナリオを頭の中に詰めておくべきだということでした。だから、こういうことは起きないということは考えない方がよい。
　これは、よく勉強されている点だと思いますが、要するに繊維が 1971 年 3 月ですよね、沖縄が 6 月でした。だから繊維・沖縄・ニクソンショックという話は有り得た話なんですよ。ニクソンのメンタリティとしてはね。だから多分どこかで日本に通報すべきかどうかというのは、ニクソンのところでやったんだと思うんですよ。「漏れるぞ」という話をキッシンジャーがしたに決まっているし、ニクソンはその時には「佐藤はいい奴だから」ということでは無かったという話だと思います。
村田：
　その繊維と沖縄のことなんですが、あの外務省の方何人かに伺っているんですけれども、あの例の京都産業大学の若泉敬さんという先生が、その頃佐藤総理の密使でやってらしたということで、彼、回顧録を書きまして亡くなりましたけれども、その頃例えば北米二課ですか、大使は…。
渡辺：
　いや、僕はＯＥＣＤですから全然関係ない。
村田：
　当時の雰囲気でですね、佐藤さんがそういったシークレット・エンボイを使っているということは、全然お気づきになりませんでしたか？
渡辺：
　僕は知らない。知る立場にない。そこのところはね、千葉さんに話を聞かれるのがいいですね。沖縄の話であれば。千葉さんという人は、大変きつい人だからインタビューは難しいかも知れないけど。彼が仕切っていたことは間違いない。日中国交正常化に関しては、橋本さん。

田中：
橋本さんはなかなかインタビューさせてくれないんですよ。もう話すことはないと言う。
渡辺：
彼もものを書くと言ってたんですけどね…。我々当時の中国スクールの連中は、毛沢東語録をもじって橋本語録を作りました。例えば「外務省には白足袋族と地下足袋族がいる。俺は地下足袋族」。
語録を作ったのは今のオランダ大使、池田維だった。当時の中国課には面白い連中が多かったですよ。橋本課長、それから僕がいてね、池田、加藤紘一、畠中等々ね。
村田：
その白足袋族、地下足袋族というのは何ですか？
渡辺：
要するに「外務省の中には、上品にやってる奴と土方みたいな奴がいる。俺は土方なんだ」という意味です。
村田：
なるほど。
渡辺：
他にも「浮気の現場を女房に見つかった時には絶対秘密にしろ。体操していたと言え」とかね。
それで円ドルショックがあって、驚くべきことに1972年に田中内閣ができてすぐ、訪中しちゃうんですよね。あれはすごいなぁ。
田中：
3ヶ月経ってないんですよね、2ヶ月ちょっと。
渡辺：
そうです。そこはね、橋本さんなんかがものすごく動いたんだと思います。
村田：
それから最初のお話でハーバードにいらっしゃってサイゴンにいらっしゃって、ちょうどそれが、1974年から1975年ですから、サイゴン陥落の時に大使館に居あわせていらっしゃったというわけでございますか？
渡辺：
はい。僕が赴任したのが、1974年の夏なんですよ。ハーバードから東京に立ち寄って、サイゴンに行って、サイゴンの大使は奈良さんという大使で、その後カナダの大使をやられましたが。私が子どもの頃から知ってる人でした。私は着任してすぐに大使に「これからヴェトナムからどんな電報を打っても東京は関心を示しません。要するにニクソンが辞任するかしないか、ウォーターゲートだから、すべてニクソンと結び付けなければ、読んでくれないでしょう」という話をしました。そこで電報の力点を「ニクソン退場とヴェトナム」ということにしてやったんです。1974年8月大使は、ニクソン退陣直後、グエン・バン・チュー大統領のもとに急行しましてね。大統領は「これは大変なことだ」と言ったんです。「ニクソンが退陣してフォードが大統領になったけれど、外交を知らない。キッシンジャーが外交を牛耳ることになる。自分はキッシンジャーを信用していない。キッシンジャーがアメリカの外交を仕切るというこ

とはヴェトナムにとって大変な悲劇だ」と言ったんですよ。
村田：
　それは大統領が？
渡辺：
　ええ、グエン・バン・チュー大統領が言いました。それが僕は重要なことであって、あのサイゴン陥落が 1975 年の 4 月 29 日、天皇誕生日なんですよ。実際には中部高原に対する北ヴェトナムの攻撃というのが同年の 3 月 5 日に始まったんです。南ヴェトナム軍は中部高原に二個師団いたんですけどね、バンメトーが 3 月 10 日に陥落して、グエン・バン・チュー大統領はその二個師団を全部撤退させる決定をしたんです。それがね、多分世界の歴史に残る大失策。中部高原から二個師団が戦車に乗って集まってくる。海岸から高原にいたる谷には道が二本しかなかった。その二本の道を戦車で降ろうとしたところを、山上から北ヴェトナム軍が狙い撃ちしちゃった。その結果戦車がエンコしちゃう。そうすると何が起こったかというと、戦車を運転していた南ヴェトナム兵のお兄ちゃん達が全部猿股一枚になって逃げちゃったんです。戦車置きっぱなしにしちゃって。だから後が全部ストップしちゃう。トラックまでもね、谷間の道ですから。それのみならず、一番歴史の皮肉は、中部高原の南ヴェトナム住民が北ベトナムが入ってくるとみんな殺されちゃうということで、みんな兵隊と一緒に逃げちゃう。それでまた道を鎖され通れなくなっちゃう。完全に敗走する訳です。その大敗走を聞き、僕はアメリカ大使館に飛び込んで、ＣＩＡから来ていた公使に、「一体何やってんだ！アメリカ大使館はこの撤退作戦にどういう態度を取ったんだ！」と言ったら、「俺達、全然相談受けてなかった。グエン・バン・チューが勝手に作戦会議を開いて決めたことである」ということでした。グエンバンチューが二個師団を引き上げて、サイゴン周辺に陣地を再構築しようとする撤退の決定というのはやはり、「キッシンジャーは信用できない。ニクソンであれば」という…。要するに 1973 年の秋にパリ協定ができたんですね。これをグエンバンチューが反対する訳です。「あれは北ヴェトナム軍が南ヴェトナムに侵攻しているという事実をアメリカ側が不問にすることによって成り立ったんだ。それは、おかしいじゃないか」ということをグエンバンチューが言って、パリ協定に反対したけれども、最後にニクソンが「分かった」と言って、その年の暮に徹底的なクリスマス爆撃をやる訳ですよ。グエンバンチューの面子を立てて。こうして彼はパリ協定にやっと賛成するという経緯があった。ニクソンに対しては大きな信頼があった。それが、キッシンジャーになったから「とてもじゃないけど」と言うわけで。それが僕の説です。
村田：
　陥落の時には日本人はサイゴンにどれくらいいたんですか？
渡辺：
　200 人くらい。これをね、読み物として読んでいただければ…「サイゴンのホワイトクリスマス」。要するに日本人が 200 人くらい残っていてね。サイゴンの陥落近しということで、「どうするんだ」ということになりましてね。大使館から「救援機を出してくれ」って言ったら東京はとても駄目だって言うんですね。まず、自衛隊の飛行機は絶対に駄目だ。我々が考えたのはね、南極探検に行った調査船「富士」に寄ってもらえないかというもの。ブリリアントなアイデアだと思ったんだけど駄目だった。結

局、日航機を出してくれると言ってたんだけど…。そこがね、東京から連絡が入ってきて「救援機を出します。但し条件が二つあります。サイゴン・タンソニュット空港の安全が確保されていること、および他の商業機が飛んでいないこと」と言うんですよ。二つの矛盾した条件というふざけた言い方でね、これは絶対出せないということだと思いました。ところが、サイゴン陥落が4月29日でしょ。「25日か26日に日航機を出す」って言うんですよ。で「何を」と言ってね。僕は公使だったんです。実質的に責任者です。奈良大使は3月5日に帰国。彼が一週間出発を延ばしていれば帰れなかったはずなんです。僕が責任者になりました。それで、「(日航機を) 送るよ」って言ったって簡単に歓迎できない。なぜなら当時ヴェトナムでは外国人の出国には出国ビザが要る訳ですよ。在留邦人の出国ビザの取得には1週間くらいかかる。「明日送るよ」なんて言われたってどうしようもないでしょう。それで僕は決定的な間違いをしまして、反省しましたけれど、サイゴン陥落は5月１０日くらいだろうと考えていました。従って「救援機の派遣は30日なら、なんとかなるかもしれない」と言ったんです。それでどういうことが起きたかというと…。結局、日本航空は出せないだろうということで、アメリカの救出作戦の対象にしてもらおうと米国大使館に頼みに行ったわけです。米国の次席大使に頼んでOKを取ったんです。その米国の大使は、ある地図を出してきてくれまして、サイゴン市内の何個所かのアパートの在るところに印をつけましてね、「ここに来てくれ」と。「それはどうもありがとう。それでいつ行くんだ？」と言ったらですね、「米軍のＦＭ放送を聞いてくれ、ビングクロスビーのホワイトクリスマスが鳴ったらそれが合図だ。」

まさに29日の午前11時に鳴ったんですよ。事前にそういうことで言ってありましたからね、「それー！」と「サヨナラー！」と言って…。ところが日本人が行った数箇所の集合場所を何千、何万というベトナム人が囲んじゃってる訳ですよ。情報が漏れてる訳です。全部柵があって、そこにＭＰが銃を構えて入れない訳です。白人だけ入れるんです。それで日本人はパスポートを見せても取り合ってくれない。それで「サヨナラー」と言って行った連中、新聞記者とかそういう連中が帰ってきて、僕は吊るし上げに遭う訳ですよ。「いったい、大使館は何やってんだー！」という話。そこで、アメリカ大使館に電話はかかるんだけど、埒があかないんで、当時の政務担当書記官の林陽君に米国大使館に行ってもらったんです。そしたら「連絡はしました。最大限努力するし、場合によっては、大使館の上にヘリコプターを付けます」というようなことまで言ってくれたんですけど、肝心の彼自身が大使館を出ようとしたんだけど出られない。アメリカ大使館の建物自体も何十万人というベトナム人に囲まれてね。鉄の扉を開けたとたんにヴェトナム人が入ってくる。彼は結局アメリカのヘリコプターに乗ってアメリカ大使館から出る。ただ悲劇はね、夏でしょ。半袖一枚で、パスポートも何も持っていない。身分証明書も何もない。それでね、アメリカ大使館の中からヘリコプターでタンソニュット空港に行って、空港から大型ヘリコプターに乗ってサイゴンのアメリカ軍の空母のところへ行った。そこから輸送船に分けられる時に、ヴェトナム人扱いされてしまう。三日、四日立ったままだった。「死ぬと思った」と言ってます。今ジュネーブの大使（現イタリア大使）です。ただ、結局アメリカのヘリコプターに乗れた人は、林さんと新聞記者が二人なんです。新聞記者の二人は、アメリカのABCとかそういう連中と友達だったんです。

それであの時、残された者は「我々は殺されたらどうするんだ、どうしてくれるんだ」とものすごく怒った。ところが、明くる日には、北ヴェトナム軍の実質的無血入城ですね。若干の市街戦はありましたけど。非常にお行儀がいいもんですから、わが新聞記者諸兄はさーっと取材に出かけていってね。「何が幸運か分からないですね。歴史的瞬間が取材できました」と述べ、それを書いたんです。

結局、サイゴン陥落の僕の教訓として残ったのは、危機の状況にある時には、その情勢判断を危機の渦中にある人に委ねてはいけないということです。というのは僕がそうだったんです。要するにサイゴンにずっといて、「サイゴンは何度も陥落するといって陥落しなかったじゃないか」とういうことでね。危機がそこまで迫っているということをどうしても自分に言い聞かせることができなかった。なぜかというと、本当にサイゴン陥落が4月29日だということになりますと、それまでにやらなければならないことが、ものすごくたくさんあるわけですよ。在留邦人の出国ヴィザの取得等々です。けれど、それは到底やれないわけですよ。そのやれないという事実が先に立ってしまうから、危機の設定が先になっちゃう。後日、外務省で、テヘランでちょっとめんどうな事件があったときに在留邦人の引揚勧告の時期は現地の大使の判断に任せようと言われたんだけど、それは僕の経験から言うとだめだ、責任は本省が取るべきだと主張したことがあります。それで結果的に言いますとね、僕はサイゴンについて言えば、「内組」が「外組」に情勢判断で負けたということです。サイゴンに常駐していた新聞記者はみんな「そう簡単に落ちない」といってました。「落ちそうだ」ということで援軍に来た記者連中は怖がりましたよ。「おまえら何言ってんだ。危機はそこまで来てんだ」と言うんです。「内組」と「外組」との論争があったんです。結局、「外組」が勝った。サイゴンは“予想以上に”早く陥落したわけです。

村田：

北米一課時代ですか、1976年からでございますね。

渡辺：

はい、僕がサイゴンから帰ってきたのが、1976年の1月末でした。夏に北米一課長になりましてね。カーター政権ができる選挙の年でした。一番大きく記憶に残っているのは、福田総理が大統領に就任したカーターさんと最初に会談をしたことです。福田総理のアドバイザーとして牛場信彦さんがいて、牛場さんが福田さんと「会談をする時はこういうシナリオでいきましょう」と言うわけです。「要するにやはり最大の安全保障上の問題はソ連であって、対ソ連政策について日米はどうやって協力するかということについて、まず福田総理から話をしていただく」と、克明なブリーフをするわけです。福田総理も勉強されて行かれるわけです。そしたら、カーターさんは会談冒頭メモを取り出しましてね、ソ連の「ソ」の字も言わない。まず自分から話さして欲しいと。在韓米軍の撤退問題と東海村の核燃料物質の再処理問題とカラーテレビ。その三点だけなんですよ。もちろん総理も勉強されていたのでそれに対する対応はされましたよ。その時、やはり首脳会談というのは難しいものだと感じました。

村田：

課長として同席されたんですか。福田訪米の時は？

渡辺：

はい。出ました。カーターさんは神経質そうな人で…。その後の訪米ということに

なりますと、シナリオはみんなでお互いに相談しあって大きな問題はこれとこれだという事前の相談があって…ということは経済局長になってからよくやりました。福田・カーター会談については、やはり新しい政権ができた、こちらも新しかった。だからそういう事前の詰めができなかったんですね。

村田：

福田訪米が3月だったと思いますけど、その前に、1月にモンデール副大統領が東京に来てるんですね。政権ができたばっかりで。あの時に福田さんと会ってるはずですが、大使はその時はご同席されていたんですか。

渡辺：

はい。

村田：

その時は、一番大きな問題は在韓米軍ですか。それをやるっていう話を…。

渡辺：それで僕はね、福田さんの訪米ではシナリオがちょっと狂ったんだけど、在韓米軍の話だけは、きちっとやったと思うんですね。外務省はそのためにタスクフォースをつくりました。東京のアメリカの大使館には、ニコラスプラットという現在のアジア・ソサエティの会長がいて…当時の安全保障課長が佐藤行雄君でした。もう一つカーター政権でやろうとしてどう対応していいか難しい問題だったのが、人権問題。人権問題というのは、日本外交の中で位置づけるのが今でも非常に難しい。それを担当してくれたのが当時の企画課長の有馬龍夫君なんですよ。僕は北米一課長でしたから、そういう面々に協力を求めました。カラーテレビの問題というのは北米二課長の斉藤邦彦君。

僕はね、北米一課長になったんですけど、サイゴン陥落の経験で自分でいうのもおかしいけど、精神的に相当にまいっちゃった。やはりね、20年近く外務省に居ると「こうすればこういう結果が出る」というような役人並みの処世術というものをわきまえていた。サイゴン陥落とその後の情報断絶状況でそういう勘が全部無くなっちゃった。帰ってきて僕は3ヶ月間、外務省研修所の指導官をやってました。年次からいうと、もう古参課長になるというのが分かっていた。それは勤まらないので「いやだ」と言って、外務研修所の指導官をやらせてもらったわけです。その指導官というのは役人的なやり取りが少ないし。でも、先例のないことですけど週に一回指導官講話というのをやったんです。勿論読みがあって、指導官の指導の対象となるのはいわゆるキャリアーで、いずれは外務省の課長になっていく連中なんですね。20数名いたんですが、彼らと縁ができるのは非常にいいと思って。今それは大変なディヴィデント（配当）です。今の北米課長だとかロシア課長だとか。そうそうたる課長がみんな僕の“教え子”なんです。

北米課長の時にね、その直前、ロッキード事件があったんです。それで僕はロッキード事件は直接担当しなかったんだけども、日米犯罪人引渡し条約の改訂交渉を担当しました。明治27年に締結された日本にある唯一の引き渡し条約を改定したんですけど、これはロッキード事件があったというんで共産党を含めて支持してくれました。それが今でも作動している。それから日米航空協定の交渉がありましてね。今でも残っています。それでね、北米一課長からアジア局の次長、参事官になったんです。それから中国行って3年おりました。

田中：
昭和53年にアジア局に入られたのは夏くらいですか。
渡辺：
夏ですね。
田中：
日中平和友好条約ができるのが1978年の8月ですけれども、この前後？
渡辺：
物理的にはその時アジア局にいたんですけど、僕は担当していなかった。アジア局はね、二人参事官がいまして、一人は三宅和助さん。僕は中国は担当していなかった。
村田：
大使のカバーされたところは、地域でいうと何処ですか？
渡辺：
南西アジアと経済問題。あと特命事項として日比通商航海条約の改定をやってました。これはね、非常に面白かったんだけど、絶対に改訂交渉がまとまらないと前任者達から言われていたものができちゃった。みんなに誉められたんですけどね。ただね、これはマルコスの判断で、やはりベトナムが陥落したということで、西側との関係をきちっとしなければいけないという彼なりの判断があったんだと思うのです。対米基地交渉もまとまったんです。同じように日比通商航海条約もまとまった。だから外的要因だなあと思いました。結局、ベトナム戦争は何だったのか、今から考えると、やはりこの戦争の結果、東南アジア地域全体が強化されたのは間違いないんですね。ＡＳＥＡＮができたのが 1967 年ですけども、東南アジアでＡＳＥＡＮというものが作動しだしたというのはベトナム戦争以降ですしね。
田中：
ちょっと前に戻りますが、そうするとアジア局に行かれる直前の1978年の5月だかに、福田さんとカーターさんが会ってますよね。その辺でですね、私の分野でですね、よく分からないのはですね、日中平和友好条約に関係するんですけどね、園田外相があとで回想して、福田さんが日中平和友好条約に熱心じゃなかったから、彼がアメリカ側に言って、福田さんに首脳会談で日中を進めろと言ってもらったと。それで福田さんとカーターさんが会った時に、カーターさんは「日中はどうですか、やってください」というふうに言われて、それで福田さんは俄然やる気になったというようなことをおっしゃってですね。それに対して緒方貞子さんが小和田さんにインタビューして書いたという本があるんですけど、それによると、そんなことは無かったという説が紹介してある。何かご記憶は？
渡辺：
ありませんね。初耳。5月の訪米というのはね、担当課長として忸怩としてですね、いい訪米じゃなかった。成果はなかった。結果的に考えればあの訪米というのは福田さんの国内政治上の考慮で押しかけていったんです。
村田：
コミュニケもでなかったんじゃないですか？
渡辺：
うん。何も成果もでなくてね。帰途、サンフランシスコで総理秘書官の小和田さん

と二人で残念がったことを覚えています。やっぱり無理があった。アメリカが来てくれって言うんじゃなくて、押しかけていった。大統領との会談時間も48分。日本の社説が全部批判する。ただ僕が偉いと思ったのは、福田総理が日本のマスコミが冷たかったということで、我々事務方に対して批判めいた発言が出てくるのかなぁと思ったら、それが一切なくてね。「いや、こういうもんだよ。ボン・サミットもあるよ」と。その意味で、福田さんという人は大した人だったと思った。

村田：

アジア局の次長に1978年の8月にお移りになって、そこの話を伺いました。それで中国に公使でいらっしゃいまして、私なぞの記憶しているところでは、教科書問題が1981年に起こりますですよね。

渡辺：

僕はね、1981年から1984年まで中国の公使をしていて、鹿取泰衛さんが大使。ほとんど鹿取さんの下にいたんです。率直に言って日中関係が一番いい時期だったと思います。胡耀邦・　紫陽時代です。それでね、唯一問題があったのが教科書問題。あとで鹿取さんと帰ってきて言ったのは、教科書問題がなければ、「お前ら日中関係が非常にいい時でよかったね。楽しかったろ」ということになったかもしれないけど、教科書問題で少しは仕事したということになって。教科書問題ということと、胡耀邦の登場とどういう関係があるのか。胡耀邦が登場して教科書問題は収拾された。

田中：

教科書問題直後に共産党大会で胡耀邦がデビューしました。

渡辺：

そうです。胡耀邦の親日ぶりというのは大変なものでした。今年10月、中国は建国50周年を迎えますが、そのときは35周年。ある日、胡耀邦がその時に3000人の青少年を日本から呼ぼうと提案をしてね。「一桁違うんじゃないか」と言ったんだけど、実際そうだった。それで鹿取大使が胡耀邦に「3000人とは大変すばらしいことですよ」と言ったら胡耀邦は「自分は30000人と言った」と。もっと大きなことを考えていたんですね。そしたら「それは駄目です」と部下に言われたから3000人になった。さらに3000人でもね、国慶節というのは一番忙しいからだめだと言われて、「国慶節にするからよいのだ」と。胡耀邦という人は大変な決断力のある人でした。

田中：

彼は何でそんなに親日になったんですか？共産主義青年団出身ですよね。

渡辺：

なんだろうなぁ。中ソ関係も悪くないんですよね。やはり国内政治的に教科書問題では対日強硬派との対立があったのかもしれません。

田中：

教科書問題は、1981~2年ですから大使が中国に赴任して一年経ったくらいに起きたんですね。

渡辺：

これはやっぱり一番深刻な話で、要するに「侵略」という言葉。それで特徴的なことがいくつかあって、中国と韓国との間で同時発生したんですね。だからこっちを押さえたらこっちが出てきたということでね。同時に解決しなきゃいけないということ

で、非常に苦労したわけです。その問題と、日本国内の世論は決して中国に好意的じゃなかったのです。むしろ朝日新聞が誤報したから起きたという話。僕は教訓として感じることは２つありましてね。一つは中国との関係というのはね、「報道されない限り問題は存在しない」。だから報道されていないことについて中国から問題提起されることはほとんどないんです。それはやはり中国の国が官僚体制であるというところにあるんでしょうかね。報道されるとそれを上の人が関心を持って抗議するということです。もう一つはやはり面子に関連することだけれども、日本はこういうことをやりますよということを事前通報することは絶対必要であるし、のみならず事前通報に十分な時間をかけないといけないんですね。一番最後の極面で官房長官談話の形で収拾するよう説得しようとした時に、「その官房長官談話は明日出しますよ」と中国側に通報したのが、前日の夕方中国側に伝えたんですね。そしたら「時間がないじゃないか」と、ものすごい強い反応があってね。48時間待ったんです。発表を遅らせたんです。それで先方は「結構です」。要するに、手続をする、根回しをする時間が必要なんですね。

田中：

こっちで終わったから、ぱっと出すんじゃ具合悪いんですね。

渡辺：

そうです。そこはね、やはり面子とかいうことに関して、その第２点が一番大きな問題でしたね。それを東京に説得することが非常に難しかった。東京はもうず一っと前に実質的にセットしたと思ってるから「出すよ」と言って。韓国にも手を打ってる。それを中国が言うんで、発表を遅らせるということ。その点を僕は非常に強く東京に連絡しました。「もういっぺん、あの嵐がやってくる事になりますよ」と。そういうことだった思いますね。

村田：

あれは産経新聞は誤報だと認めたんですね。「『侵略』を書き換えた」というのは。あれは要するに分からないわけですか。誤報なのか、誤報でないのかというのは？

渡辺：

誤報か誤報でないかというのは、非常にデリケートな話で。もともと日本の教科書検定制度というのは、客観的に見ても、僕は問題があると思うしね。

田中：

多分ね、前の年に書いてあったものの中にね、「侵略」と書いてあったものを次の年に出たものでは「侵出」に書き換えたという、こういう比べ方だと多分ないんだと思うんですよ。だけどね、検定の中で出てくる「これをじゃあ今度書き換えましょう」となんかこう中に入ってる人の元原稿みたいなものがあるでしょ。元原稿の中に「侵略」と書いてある、これよろしくないと書き換えたのはあるかもしれない。それは分からない。だから渡辺昇一さんとかが比べているのは、前の版に「侵略」とあって、後の版で「侵出」になったと、こういう事態はないんじゃないかということじゃないかと思うんですね。

村田：

なるほど、なるほど。

村田：

1984年に、調査局長におなりになったんですか。それは岡崎氏の後任ですか。二代目ですか。

渡辺：

そうです。その時のことで僕が覚えていることは３つありまして、一つはゴルバチョフ登場なんですね。それでね、ソ連はどうなるんだろうということを徹底的に勉強させられたんですよ。今でも覚えていることは、アメリカも含め、日本も含めてね、専門家、学者の間に「システミックの変革は無いだろう」というのが通説だったんですね。政策の変更、人事の変更、機構の変更はあるけれども、共産党解体というのは誰も予想しなかった。これはやはり一つの教訓だったですね。もう一つは、日本の防衛費が１％を突破するという話。それが国際的にどういう影響を及ぼすのかということを勉強しろって言われましてね。それでやはり近隣諸国との関係は相当デリケートだけれども、1%を超したって、それが２％、３％になるという話じゃないということで、日本の国内で心配する程のことではないという報告書を出したんです。もう一つはＳＤＩ。ＳＤＩに対して、日本としてどういうスタンスを取るのかということで、一週間でヨーロッパ主要各国全部まわってくれと言われてまわったことがあるんですよ。結果的に見てＳＤＩというのは、ロシアにとって大変大きなインパクトを与えましたね。

経済局長の時は非常におもしろい仕事ができたと思うんですけどね。

田中：

前川レポート？

渡辺：

前川レポートの後ですね。要するに日米関係が日に日に悪くなっていく。それでね、マンスフィールド大使が「日米貿易赤字５８０億ドルの重み、日米関係に対する影響についてもっと真剣に考えて欲しい」と言われて。何かしないといけないんだけど、きっかけがないんですよ。それでね、外務省が、中曽根総理訪米を提案するんですよ。外務省というところは、普段国内的に何の権限もリベレッジ（梃子）もないところなんです。ところが総理訪米ということになるとリベレッジが出てくるんですね。要するに総理訪米になると、総理の訪米を成功させないといけない国内政治上の至上命令がある。「訪米を成功させるためには、こういうことをしなきゃ駄目ですよ」と言うと総理官邸が動いてくれる。バックアップしてくれる。そうして政策ができていく。そういう訪米という、何というのかなぁ、事がなければとてもできないことをやんなきゃいけない、ということです。それで訪米を提案をしたら、後藤田官房長官が、「外務省は訪米を成功させる自信はあるのか」と逆に聞かれましてね。我々は非常に嘆き、また怒ったんですね。我々と一緒に成功のための努力をしてもらわなきゃならない人がこういうことを言われてはかなわないと。結果的に言うと、大成功だったんです。ただね、それはね、こういう文書（注.「外務省はこう考える－総理訪米からベネチアサミットまで　1987.7.17」）を作ったんです。これはオンレコにしてもいいんだろうと思うんですけどね。当時僕は経済局長だったんだけれど、ビビってたものですから名前をつけないで出しちゃった。世の識者にお送りしたんですけどね。

村田：

大使がお書きになったんですか？おしゃべりになったんですか？

渡辺：

口述したんです。はい。要するに訪米で、日本の緊急経済対策を打ち出そうと。結局打ち出せたんです。要するに（イ）補正予算ということで財政支出を増やそう、（ロ）200億ドルの資金を還元しよう、（ハ）その補正予算の中で10億ドルを外国品に使おうと、提案したんです。３つとも外務省が起案したんです。

10億ドルで外国品を買うという結果として２つあって、１つは政府専用機を作ろうと。もう一つは外国品じゃないとだめだというものがそう存在しないわけなんですよ。そこで洋書なんです。大学も随分…。

田中：

大学も欲しいもの買いましたよ。突然ね、洋書買えって言われて。

渡辺：

あの時はね、外務省が国内経済政策でイニシアティブを取った数少ない事例ですね。それで総理訪米は大成功でしてね。中曽根さんも喜んでね。その時、僕が言ったのは、「こういうことをやるのだと言って大成功になったんで、やったというわけではない。重要なことは実施することだ」ということで、それをベネチア・サミットに結びつけた。その結果、ベネチアサミットでも大成功した。その際の中曽根総理のパフォーマンスはすごかった。それで「バンザーイ」と言ってたところが、東芝事件が起きたんです。で、これで本当にシュンとなったですね。東芝の社長、会長が辞めちゃいましたからね。それで日米関係は大揺れが来るなと思ったんです。あの時…ソ連の潜水艦の音がしなくなると…。

田中：

あのスクリューが付いていたんですね。

渡辺：

その音のしないスクリューを造る自動的な工作機械を輸出した。

村田：

ＣＯＣＯＭの問題は外務省の経済局は直接扱ってらっしゃらないんですか？

渡辺：

いや、経済局の担当です。国内のＣＯＣＯＭ体制を強化しようということで。その際、通産省と論争がありましてね。それまで外務大臣という名前は外為法に入ってないんですよ。だから「国際の平和と安全」という言葉を入れて、それで外務大臣という言葉を入れるというのが外務省の主張だったんです。それに通産省が反対してね。大きな論争でした。結局、外務大臣という名前が入ったんですけどね、それが経済局時代のもう一つの思い出ですね。

田中：

あの、この時期はもう少し前になるんでしょうか、日米半導体協定というのは外務省の経済局はあまり関係なさらなかったんですか？

渡辺：

基本的には通産省が主体です。あれはね、通産省の通産審議官と機械情報産業局の次長とがやってたんです。それで外務省も課長は参加してました。数値目標的な発想

を外務省としてＯＫすることについて外務省の中にものすごく議論があったんです。その時の担当課長が田中均君です。

田中：

北米二課長？

渡辺：

北米二課長です。経済局長の時に総理訪米が何度かありまして、それでまさにさっき言ったように、もう日米間のコミュニケーションというのはカーターの時代の時とは、全然違うわけですね。どういうことをすれば総理訪米が成功になるのか、その前提として訪米が成功することはアメリカにとってもプラスであるということでね。事前にハワイとかどこかで、ホワイトハウスとか国務省の連中と会いましてね。どういうことをやるのか、それでまぁ手の内を申しますとね、まず期待値を下げようと。だから今度の訪米というのが如何に難しい訪米か、成果は何もないかもしれないよという話をしようと。この問題は取り上げて、この問題は取り上げないということをやって。あのその時に今でも記憶に残っている一つのことは、アメリカで一番僕が頼りにしていたのが、東アジア担当次官補だった、あの、死んじゃった…。

村田：

ガストン・シグール？

渡辺：

そうそう。彼はアイデアは出さないんだけど、“Everything would be all right. Don't worry”。そんな事言って、ほんとにそうなっちゃう。ああいう人はいいですね。僕にとって小父さんみたいな人物だった。経済局長のあと、サウジに行って帰ってきて、外務審議官。

村田：

サウジも岡崎さんの後に行かれたんですか？

渡辺：

そうです。

村田：

割と岡崎さんの後というのが続くんですね。

田中：

うん、サウジは岡崎さんほど長くはいらっしゃらないですね。

渡辺：

一年半。

村田：

一年半ですか。それは何か省内の人事上の意味ですか？

渡辺：

そうですね。やはり外務審議官ということだったんでしょうね。経済局長から出る前から。僕はね、ＯＥＣＤ大使を希望してたんです。そしたらＯＥＣＤ大使で小和田さんが行ちゃったんです。

田中：

今の話なんですけど、ちょっとセンシティブな話かもしれないけど、外務省ってのはこのくらいのクラスの人事というのは誰がやるんですか？

渡辺：
次官です。
田中：
全部次官がやるんですか？
渡辺：
次官か、官房長。僕が外務審議官をやった時の経験ではね、外務審議官というのは官房のラインじゃないんです。だから人事について相談されたことは一切ない。
田中：
そうですか。
渡辺：
僕はサウジに行けと次官に言われてね。ある日夕方「次官が呼んでいます」とね。「人事だ」と思ったんです。僕は人事は経済局の方の人事の話をするんだろうと。経済局の次長以下総入れ替えをするという話を僕が聞いていたんですけど。そのことを次官が言うのだろうと思ってたんですけど。村田次官は「人事だけどねぇ」と言われて。「はい」と言って「君の人選のことなんだよ」と言われて。しかもサウジアラビアでは。
田中：
あまり、時間的に考えるゆとりとかって…。言われたら、それでお引き受けいたしますとか。
渡辺：
まぁ、2,3日考えさせてくれというのは、言うんですけどね。これは、僕は消していただきたいんですけど、僕はニューヨークに行きたかった。僕はアメリカで幹部候補生研修をしたんだけど、アメリカの勤務というのはシアトルの総領事館一年だけなんです。しかも、シアトルは3人公館。1950年代ですけど。総領事と僕ともう一人。その時総領事と喧嘩しちゃったんですよ。それで、一年で帰されちゃって。3人目の専門職のおじさんがね、「外務省で絶対上役と喧嘩してはいけない、上役と喧嘩したら出世できないよ」と言われてね。もう出世できないと思っていた。ところが帰国して挨拶に行った北米一課長が「あそこでクサクサしてるより帰ってきた方がいいよ」と言ってくれたんです。その後、発見したことは「外務省では上役と喧嘩してはいけないけど、喧嘩してもいい上役というのは何人かいるよ」ということなんです。僕が喧嘩した相手はその一人だった。
村田：
話はすごく戻るんですけど、ハーバードにいらっしゃってますけど、外務省の方は普通ご入省になってから、アメリカの大学とか大学院に留学なさいますよね。大使はどちらに留学されたんですか？
渡辺：
僕は最初はオハイオのアンティオク大学。2年ですから2年目はプリンストン。ハーバードは中間研修。
村田：
そうすると、最初の2年とこのハーバードと、今おっしゃったシアトルですか、その計4年をアメリカでお過ごしになった。

渡辺：
　それだけなんです。それで僕は絶対外務省で破れない記録を持ってるんです。それはね、北米一課長をやってワシントン勤務がないのは僕だけなんです。逆に言うと、北米一課長になる人はワシントン勤務がある人なんです。僕はワシントン勤務がないにもかかわらず、北米一課長にしてもらった。ただし、アメリカ関係の仕事をずっとしてるんですね。先程申し上げたように、中国課に行くと米中関係ということでアメリカのこともしました。
村田：
　言葉は英語だけですか？
渡辺：
　英語だけです。だから本省でアメリカ関係の仕事ということになると、結構多いんです。
村田：
　それで外務審議官。
渡辺：
　外務審議官の仕事は二つありましてね。一つはサミットのシェルパ。それともう一つはＳＩＩ、つまり日米構造協議。時間的には日米構造協議の方が多かったんですね。他方、ウルグアイラウンドの出発はみんなでやったんですけどね。結局、外務審議官という仕事はシェルパの仕事と特命事項ということです。通常の経済摩擦というのは経済局長がやってるんです。僕が経済局長の時もそうでした。僕が経済局長の時のシェルパは北村汎さんだった。北村さんの時はシェルパの仕事だけでよかったようだったけれども、僕の時はＳＩＩの仕事の方が多かった。これは、きついけど面白い仕事でしたね。ただ、1986年の経済局長を2年やって1989年から外務審議官を2年やって、それがちょうど日本経済にとって問題な曲り角の時期なんですよね。
　僕がやったことがいささかでも…、いささかではなく相当マイナスになったのかどうか。ただ、外務省の経済局長とか、外務審議官というのは経済問題で1つだけやっていないことがあって、それは国際通貨問題と国内金融政策なんです。多分バブルがバストしていく過程ということで一番大きい問題はやはり金融政策だったんでしょうね。
田中：
　ＳＩＩが積極的に日本にとって害になったということはあまり無いでしょう？
渡辺：
　ないんです。ただね、あそこで財政支出増やしちゃった。
田中：
　財政は最終報告あたりで触れたんですね。
渡辺：
　そうそう。あのころは今から考えると恐ろしい話なんだけど、日本の財政ポジションはＧ７の中で一番良かった。だから財政赤字の話というのは、大蔵省は随分やったんだけども、そんなこと言ったっておかしいじゃないか。高齢化社会を眼前に控えている今やらなければ日本の社会インフラの整備はできませんよ、と言うことで公園から道路までダーッと建設計画が作られてね。大蔵省は最初は抵抗したんだけど。結果

的には公共事業というのは日本の経済の中に大きく組み込まれてしまった。
田中：
今から考えれば、あそこでお金を出すにしても、普通の公共事業でリストアップするかたちじゃないかたちになっていればね。もう少し良かったかもしれないですけどね。
渡辺：
ただね、自分が関係していたということでかなり欲目に見るんだけど、本当に画期的な作業だったと思うんですよ。外交上の内政干渉という通念があるけれども、それを完全に破ったでしょ。その意味で日米構造協議は非常に興味深い作業であった。それは内政干渉の連続であった。日本は「アメリカのベッドルームが大きすぎる」、アメリカは「日本の台所が小さすぎる」と。「どうしてくれるんだ」と。経済の分野ではもう内政干渉の連続なんです。純粋に内政の部分なんてない。僕が一番抵抗したのは財政なんです。財政というのは主権事項であるということでがんばったんだけど。ただ、僕が正しかったのは、大店法の問題。それから、やはり競争政策、独禁法ですよ。日本の独禁法というのは、あまりに甘いじゃないかという指摘があった。僕はこの指摘は正しいと思って、異例なことなんですけど、大蔵省と総務庁に行ってね、公正取引委員会の人員と予算を増やしてくれと言いに行ったんですよ。その時の主計局長が後年公取委員長になられたが随分お世話になった。
それから市街化農地の土地並み課税。全体として構造協議は僕は成功したと思う。何故だろう、国内世論の反対が弱く、むしろ、前向きだったと思うのは、消費者の声というのが大義名分になってそれをアメリカが強く主張して、我々もそうだと言って。それをマスコミに諭しちゃった。もっと興味深いのは一つの省だけがいじめられるということがないんですよ。全部の省がいじめられるんです。財政支出増で大蔵省がそうでしょ、大店法は通産省、農林省は市街化農地、建設省は建設入札制度。ということでね、みんなが「血を出せ」ということだったもんだから。俺たちだけいじめられているという図式にならなかった。
それから当時は、海部内閣。自民党幹事長が小沢一郎さん。これはすごかった。普通なら経済閣僚懇談会をベースにして自民党の政調の各部会が積み上げていくんですね。それを小沢さんは「絶対、経済閣僚懇談会にあげるな。内閣で一人だけ自分とのコンタクトをとれ。党は完全に自分が押さえる。」ほんとうに押さえちゃった。政調の部会は一切無しで、海外経済調査会というのを作ってそこで全部やらしてガス抜きして、後はご自分で全部取り仕切った。あとで聞いた話によると、あれで小沢さんは敵を作った。なんでそれができたかというと、金丸さんの全盛時代。竹下さんが誉め殺しで…。金丸さんという人がいたから小沢さんができた。小沢さんの力というのは実は、そういう人がいるという前提でものすごい発揮できるという見方があります。
村田：
小沢さんで思い出したんですけど、大使、審議官なさっている時に、湾岸危機、湾岸戦争ですよね。危機の時の経済貢献には直接タッチされたんですか？
渡辺：
多国籍軍への貢献策を考えるタスクフォースの長です。要するにＳＩＩをまとめあげて、ヒューストン・サミットがあって。

田中：

ヒューストンサミットがあってすぐ湾岸危機。

渡辺：

それでね、僕はヒューストンサミットが終わって夏期休暇をとった。休暇をとってる時に湾岸危機が起こった。僕は新潟かどこかにいた。「本省に帰る」といったら女房に怒られてね。「あなたは自信過剰だ。あなたが必要とされるんなら、あなたの行き先は連絡してあるんだから向こうが呼びに来る。呼ばれもしないのにのこのこ行ったら自意識過剰でおかしい」と言われてね。それから一週間後か、５日後かな、本省に出勤したのは。そしたら栗山次官から「君、休暇がとれてよかったね。そういえば、君、サウジに居たね」と言われて、「こりゃやばい」と思って。そしたらね、やはり日本として多国籍軍に貢献することになり、省内にタスクフォースが作られた。「その長をして欲しい」と「でも、それはおかしい」と、「まさに政務の外務審議官である小和田さんの仕事である」と。小和田さんはね、海部さんがサウジに行くということでこれに同行していくということで、いずれにしても外回りをやらなきゃなんない。僕は休暇を取ったという弱みがあるもんですから、受けちゃったんです。結果的には、これは僕の長い外務省のキャリアでいろんなことをさせてもらったけど、最も後味の悪い仕事でした。要するに、ＳＩＩにしても、サミットにしても、総理訪米にしても、一件終われば、「バンザーイ」してね、酒を飲めたわけですよ。ところが、このタスクフォースはいつ解散したか分からないくらいに後味が悪くてね。成果が何だったかというと、何も言えない。これは『諸君』の対談で話しましたが、外務省が徹底的に叩かれた。いろんな意味でね。だけど、私の意見では平和と戦争の問題に直面した経験が、日本には政府としても国民としてもないし、何もやれない訳ですね。みんな戸惑っちゃって。マスコミも戸惑う、国民も戸惑う、その戸惑いのはけ口が全部外務省に行った。外務省としても経験が無い訳ですから。一番は物の輸送について貢献してくれということで説得に努力しますが、日航、全日空、海運会社みんなＮＯですよ。それで、運輸省の説得。それでも危険だから船は出せませんと。それをアメリカに言ったらカンカンに怒っちゃった。「今、ペルシャ湾に日本のタンカーが何隻いると思いますか」と怒られました。それでは航空機ということだが、日航は絶対だめ、全日空もダメ。結局、第三国機をチャーターして。後味が悪かった。

村田：

あの時、よくマスコミでブッシュフォン、ブッシュ大統領がよく海部さんに電話かけてきて、いろいろ頼んだというので揶揄して、ブッシュフォンなんて言って報道された範囲で、私の記憶が正しければ、大統領が総理に自衛隊機だか、自衛隊の船だかを送る可能性について依頼したという話が朝日などの報道にはあったかと思うんですが。大使はそういうことは直接何か…。

渡辺：

それはないと思います。だけども何でもいいから協力してくれという話だったと思うんですよ。僕もね、率直に言って民間機がどうしても使えないというのであれば、自衛隊の航空機、輸送船を使わざるを得ないという意見になりました。ただ、そこはね、多分、栗山次官、小和田外務審議官と意見が違った。

村田：
お二人と大使の意見が違う？
渡辺：
うん。僕はそれしかないと思った。
田中：
あの時の日本の貢献の発信の仕方に批判があったように覚えてるんですけど。一番最初に海部総理が言った時は、あまりやるといっても、具体的に金額の面で出た数字は非常に小さくて、その後、かなり五月雨的に出たというパターンがあって、それはやはり日本の組織からするとやむをえない事情なんですか？
渡辺：
組織からやむを得ないというより経験がなかった。僕たちのタスクフォースとしては、やはり運搬手段として貢献できないかということでしたね。人が行くということで、医療団とか、これも実現しない。打率からいうと一割か二割しか出来なかった。僕たちが、本当に心配したのは、ボディーバッグ。湾岸戦争が熾烈になってね、毎日のようにアメリカ兵の死体がボディーバッグに入れられて、ＮＹ、シカゴ空港に運び込まれた時にね、「日本はどうしたんだ。何もやってないのか」と言われた時には、日米安保はもたないだろう、という危機意識があったんですね。ガスマスク、防毒マスクの話があった。要するにイラクが、化学兵器を使うかもしれない、ガスマスク提供というのは有意義だということになり、日本が出しますということにしようとしたんですが、結局だめだった。
田中・村田：
武器なんですか？
渡辺
うん。ガスマスクが武器だから駄目だということだった。信じられない。
村田：
自衛隊が持ってるわけですか？
渡辺：
自衛隊が持ってる。だからメーカーに頼めば、いくらでも出せる。だからほんとに戦争ということを聞いた途端に、日本という国は組織的にシュリンクしちゃう。動けなくなる。金縛りにあっちゃう。
田中：
その場合、ただ経験が無かったということですが、やや立場を離れて、クリティカルにリーダーシップというものを考えてみるとどうですか？海部さんと、それからもう一人小沢さんも自民党でしょ。それでいろんな話を聞けば、小沢さんはあの頃、外務省に大変批判的になったと言われてますけどね。
渡辺：
小沢さんの発想と、栗山次官の発想には、相当隔たりがあったですね。やはり栗山さんという人は本当のハト派ですよ。僕は中国問題とかそういうことに関しては外務省内では最もハト派だとか言われてたんですけどね。自分でタスクフォースで何かやらなきゃいけないと思いながら、これもあれもだめだった。、結局、要するに、日本は危機を前提とした組織が無かったわけなんです。自衛隊じゃないと駄目なんです。た

だね、僕は反省としてね、日本のリーダーシップっていうか、懸案の一つだと思うのは、あとで在外の一同僚に言われたんだけど、日本はね、直接多国籍軍に対する貢献ができなかったとしたら、最初から難民だけやるといって、バーッと難民救援の旗を上げればよかったんじゃないか。難民関係全部やります、難民の救済の飛行機だということになれば、相当大きなことができたと思います。なんかやっぱりそういう識見というか…。ほんとにフラストの多い時間でしたね。

村田：

天安門事件の時は、大使はどうなさってましたでしょうか？

渡辺：

僕はね、サウジじゃないかな。

田中：

お戻りになる直前くらいが天安門ですかね。

渡辺：

ただね、シェルパの仕事はそんなに…。やっぱりロシアですよ。ヒューストンサミットが 1990 年。1991 年がロンドンサミット。90 年のヒューストンサミットの準備から始まったんだけど、やっぱりベルリンの壁が落ちたと、1989 年ね。それはドイツのサブ・シェルパが話しましたけどね。「こんなことが自分の生涯で起きるとは夢にも思わなかった」と。それでＧ７としては、ただソ連の解体の関係では必要な仕事をしたんだと思いますけどね。ただ、日本としては北方４島問題、平和条約の問題があって、ゴルバチョフとかペレストロイカのロシアに対する支援についてどうしても腰が引けるわけですよね。その腰が引けるのを是正するために、ロシアからどういう情報をとるか、或いはＧ７のサポートをとるかというのが非常に重要になってくる。それで少なくとも北方４島問題というのをＧ７の問題にするのです。ヒューストンサミットでね。ロシアはこのことに怒ったわけだけども、僕はそうしなければ、千島問題に関するその後のこれだけの高まりというのは無かったんじゃないかな、と思います。

これは外にはあまり出てない話なんだけども、1991 年夏ロンドンサミットの後、クーデター騒ぎがありました。ゴルバチョフが郊外に出ている間に、ＫＧＢとか軍とか権力機関が一緒になってクーデターを企てた。ある日、僕は外務省に行ったら、小和田次官が「君すぐロンドンに飛んでくれないか」と。「なんでですか？」と言ったら、「クーデターが成功した場合、Ｇ７としてどう対応するかＧ７シェルパとして協議して欲しい」と。ロンドンがまだ主催国としての議長国でしたから。朝、言われてね。「そんな事言ったってパスポートも持ってませんよ」。ヨーロッパ行きの飛行機は全部午前中に飛んでるんです。ところが、小和田さんは頭の中に国際線の時間表が入ってます。「夕方発つとね、アンカレッジーアムステルダム経由の日航がある、そのアムステルダムからロンドンに入ればいいじゃないか」と言われました。それで家に帰って、パスポートを取って、クーデターが成功するという前提で飛び立ったわけです。それでアムステルダムに行ったら、僕の日航はちょっと遅れて着いたんです。着いた途端に、ロンドン行きのＢＡ機が隣の滑走路からサーッと飛んじゃった訳なんです。それで 3 時間か、4 時間遅れてね。ロンドンに行ったら「クーデターは失敗」って。まぁ、折角来たんだからということで、英国の外務次官とシェルパの所に行って、「実はこういうつもりできたんだけど、私のマンデートが消えた」と。でも先方は「ところで」と

言うわけなんです。「クーデターは幸いなことに制圧されたけど、やはりクーデター後のゴルバチョフのロシアを、いかに支援するかということについて、改めてＧ７で協議したい。来週、Ｇ７のシェルパをロンドンに集める。まぁ、いい時に来た」と言うわけですよ。それでね、「そんな僕はマンデート持ってない」と言って。しかし、その気持ちは分からないでもないので、小和田次官に電話したんですよ。「ゴルバチョフ支援というのは非常に重要だから」と。「じゃあ分かった」と小和田さんが言うので、「それじゃ、僕は週末ロンドンで過ごして来週の水曜日に帰ってきますから」と言ったら、「何を言ってる！」と怒られて「すぐ帰ってこい。お前から（今のような）話を総理、外務大臣、大蔵大臣にしないと日本はもたないぞ」と言われてね。すぐ帰ってきちゃったんです。

生まれてはじめてね、成田からパトカー付きで官邸にパーッと入ってね。官邸で総理以下が僕を待っておられてね。それでサーッとまたロンドンに行った。その話はね、まだ外には出てないんです。クーデターが成功する可能性大という前提でもう日本政府は動いていたということなんです。

田中：

クーデターがあったその日にお出掛けになったんですか？

渡辺：

そうそう。だからいろんなことがありました。それからね、ロンドン・サミットの非常に大きな問題は農業でしたね。

村田：

農業？

渡辺：

ウルグアイラウンドが最後の段階だったんです。それであのヒューストン・サミットとロンドン・サミット双方ともそうなんですけど、ウルグアイラウンドが 1986 年に立ち上げてから、もう最後だ、最後だと言いながら全然まとまらなくてね。最後、農業問題になって、結局、日本として、農業の食糧安全保障という言葉をＧ７のコミュニケに入れるかどうか。結局、入ったんです。ということで、サミットを振り返って見ると、経済問題というのがズーッとなんらかの形で残っていたんですね。同じイシューがね。政治問題は一つ一つ片付くからいいのですけどね。

田中：

またね、これで今度新しいラウンドが始まってもね、また農業問題が常に出てくるんですね。

長時間にわたり、ありがとうございました。